

## 金沢城御宮跡出土の石造遺物

三浦純夫

本資料は、金沢大学理学部の校舎建設にともなって、金沢城内の御宮跡とよばれる場所(第1図)から昭和46年に出土したものである。御宮跡は城内の北西部に位置しており、一つの郭となっている。標高は42mを測る。この郭は、草創期の金沢城内の状況を伝えるとされる『加州金沢之城図』(『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ(金沢城史料編)』石川県教育委員会1991)では「村井出雲」の名が記されている。北には一段下がって「藤右エ門丸」とよばれる郭が存在する。出土地が御宮跡とよばれるのは、寛永20年に加賀藩第四代藩主前田光高が東照宮を勧請したため、これは明治に入って尾崎神社と名を改め、金沢市丸の内地内に移築された。

金沢大学資料館に所蔵される資料は宝塔の笠1点と五輪塔の水輪2点である。

第2図1は宝塔の笠である。軒幅25.5cm、高さ20.7cmで上部に一条の沈線があり、頂部に八葉複弁の反花を彫出している。この反花は、下端に請花をもつ相輪と組み合わせをなすもので、沈線より上は露盤を表現したものとみられる。材質は凝灰岩である。この形はこれまで、五輪塔の火輪とされてきたが、相輪がのることが確認されるので、宝塔として紹介しておきたい。ただし、塔身は水輪と同じ形状を呈しており、五輪塔的な要素もかなり含まれるので、さらに検討を重ねる

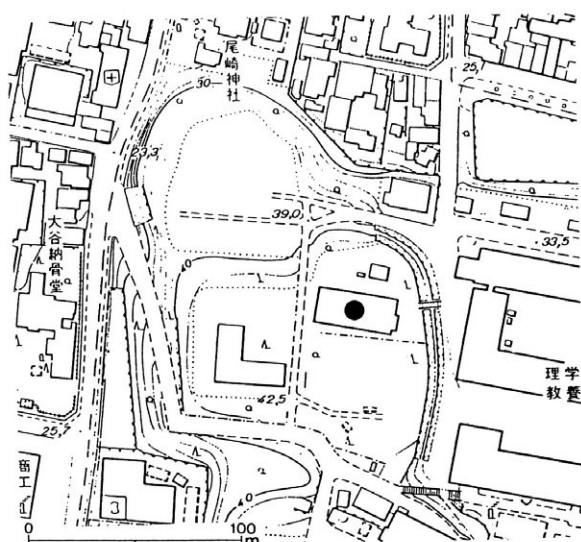
必要がある。類例は金沢市の普正寺遺跡や能美郡辰口町の宮竹中世墓群など少なからずみられる。

2・3は五輪塔の水輪である。2は最大径28.5cm、高さ17.0cmで、円相のなかに金剛界大日如來の種子「バン」が陰刻される。材質は凝灰岩である。3は最大径23.3cm、高さ14.0cmで円相のなかに「バン」が明瞭に陰刻される。凝灰岩製である。

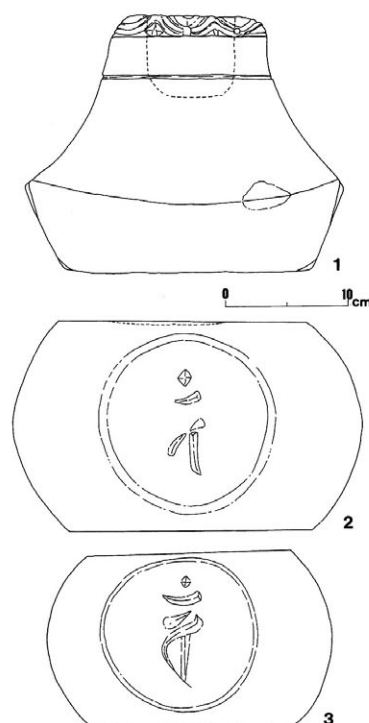
以上3点の石造遺物の時期であるが、15世紀の前半から中頃にかかる所産と理解しておきたい。なお、2は1と組み合わせられて、宝塔の塔身となる可能性がある。

金沢城内の石造遺物としては、本例のほかに、本丸跡に存在した石層塔(あるいは宝篋印塔)の塔身1点(『金沢大学資料館だより』No.5 1994)がある。これは14世紀の所産とみられるから、14世紀から15世紀にかけてこの地域において中世墓が営まれていたことがわかる。金沢城築城以前の土地利用を知りうる重要な資料である。

(石川県埋蔵文化財保存協会調査課長)



第1図 石造遺物出土地(●印)



第2図 石造遺物夷測図